

大正十二年七月廿七日第三種郵便物認可
大正十三年十一月三十日印刷結本

大正十三年十二月一日發行（毎月一回）

スキー地としての北海道

山とスキー 第四十四號

札幌 山とスキーの會 發行

廣田戸七郎著

スキー ज्याムピング

四六判 一七五頁
定價 金 壹圓

スキー競技に於て最も重要な ज्याムピングの一切を解説せるものである。

北海道帝國大學スキー部編纂

スキー術階梯

四六判 一二〇頁
定價 金 六拾錢

本年度増補改訂再刊。直接本會より御求めの方は特價金五拾錢

札幌山崎會の發行

次目號四十四第

	記事		
スキー地としての北海道	加納一郎	三〇
一、交通		四〇
二、氣候と雪		六〇
三、スキーの發達		九〇
四、主なるスキー地		一一〇
青山温泉附近		一一〇
青山温泉を中心とするスキー旅行		一三〇
小樽市		一六〇
小樽を中心とするスキー旅行		一八〇
札幌市		一九〇
札幌を中心とするスキー旅行		二〇〇
五、主なる山岳の登路		二四〇
六、スキー競技會		二七〇
スキーに關する參考書		三〇〇
寫眞版			
中山峠			
奥手稻山附近			
蘆別岳			
蘆別岳連峰の一部			
地圖			
青山温泉附近		一四〇
札幌小樽附近		二一〇



スキー十二則

- 一、スキーは高尚、明快、壯美なものである。汝の技術を以てして仲間を悪評し、蔑視することあつてならない。
- 二、車内、道路、橋路其他の野外では仲間や小供を顧慮せよ。「他人を顧慮せよ」とは汝の最上の警語である。
- 三、他人に面倒をかけなければならぬ云ふことは、汝に恥辱と不面目をもたらすものである。肉體的にも精神的にも、まだ十分でない時は、敢てスキー旅行をなすべきではない。
- 四、大慈大悲の母なる自然は汝の技術に酬ゆるに、その限りなき泉より新鮮なる生命の熱き、力を與へてくれる。それ故に他人の所有や、苦心して作られたる生垣を犯してはならない。如何に元氣があらうとも故郷へ歸るときに自らの部屋を打ちこわし荒す人があらうか。家に在るごまく之を思へ。所有は神聖である。
- 五、ジャムプ場、ジャムプ臺、又は指導標など、他人の所有又は建造にかゝるものを使用しなければならぬときは、その目的通りに、所有者又は建造者の心を以て使用せよ。自己及び他人の旅行及び此のスポーツの練習を安からしむるものを濫用することの結果を思へ。



六、仲間の危難に遭遇したときは、力添へをなさず棄て去つてはならない。たゞ自己の現在を以て救助し得ず、一つの生命が危殆に頻せるときは、谷に下り或は最寄の小屋に救助を求めよ。他人の生命を救ふことは自らの生命にきりて此上なき賞讃すべき仕事である。

七、生命を保全するの必要上、他人の所有を犯すことを敢てするは、その爲に汝の救助が成りたるなれば感謝すべきである。謝し且つ惹起せる損害を償ふべし。生命救助の高尙なる行爲も、犯したる所有權の回復を免るべきではない。

八、個人又は俱樂部所屬の小屋に入るときは最高の尊敬を以てせよ。道具は目的通り正しく使用せよ。汝が招ける客に、わが家を去るときに望むが如き賓客の地位を以て去れ火氣及び燈火を滅し、用ひたる全てを淨め、窓戸を閉して負ふべき支拂をなせ。

九、幸福を望むならば、逃げ行く羚羊、其他の獸類を見れば、遠く避けて通り、野獸を追ひ又は彼等を不安ならしめるな。

一〇、森林の中に道をさるときは、夏よりも更に樹木をいたはり、疎開の地に出ても植林せられた稚樹を踏みにじるな。最寄の林道を視よ。

一一、山の住民が自分の土地で、我流の方法で冬を樂んでる様とも、彼等やその小供等を逐ひのける權利をもつてゐると考へてはならない。彼等は高慢ではないが、ミ云つて汝等の召使ではない。

一二、見知らぬ人の聽いてゐる宿舎で、汝及び汝の友達が恥ぢねばならない、なしとけられざりし事柄を大袈裟に云ふな。

スキー地としての北海道

加 納 一 郎

北海道は年々、文化が高められ、交通が開けて、且つその實際が理解せられて来て、夏季此の地を訪ふ人は著しく多くなつた。それは朝夕の涼しさに加へて、廣漠たる農地や、起伏する丘陵の牧場や、さては、連り循る原生の森林など、自然の趣が、日本のサンマー・リゾートとして洵に好適であるのに基くのであらふが、それかと云つて、冬季は全く、自由に住む熊の様に、冬籠りの状態である云ふのではない。十二月中旬から三月の末まで、平原や中山性の山岳でさへも大部分雪に蓋はれて、ウインタースポーツ特にその王者と呼ばれるところのスキーには甚だ適當地として、他にその比を見ないのである。

或る場合日本のスキー可能なる地方を、關西、關東、北陸、東北、北海道、樺太の六に別けられることがある。今假に此等のスキー地を比較して見ても、樺太は特に冬期間は交通が不便であり、關西、關東は、その積雪とスキー場が不十分であり、日本の深雪地であるところの北陸また、その雪質に於て、劣るところ勘からず、獨り東北地方は稍良好なる雪質を持つのであるが、その文化の程度に到つては遺憾ながら、より北方に在るところの北海道に遜色あるをまぬかれない。ここに、札幌、小樽等の大都市（いづれも人口一〇万以上、高田市は三万、青森市は五万）は近郊、殆んど市中に於て、良好な積雪の下にスキーを行ひ得るところは他に類を見ないのである。

スキー地としての詳細は後に順次記すのであるが、或は北海道と云へば甚だ北に偏してゐる様に思はれる傾向があるけれども、假にその主都たる札幌（北緯四三度〇四分）を基準として歐洲の諸都市と比較すれば、ロンドン（北緯五一度二九分）ベルリン（北緯五二度三〇分）チューリッヒ（北緯四七度二三分）より尙南であつて、ローマより僅に北に在る有様であり、また東京より札幌までの距離を見ても、上野を夜の急行列車に乗れば翌々日の朝には、札幌、小樽に人となることが出来る。即ち此の旅によつて徒爾なるは僅に一日にすぎない。スウイスの有名なスキー場であるところのダボス附近へ、ロンドンから連絡する急行によれば二四時間で達せられるに比すれば稍遠い感があるけれども、此は交通機關の改善により將來を期待し得る事柄である。

かく北海道は特に冬季間、遠く離れた寒國である云ふ觀念を全く裏切つて、優秀なスキー地として他にその比を見ずやがて春より秋にかけては透徹、幽邃な山岳湖の多くを訪ね、冬は絶えざる粉狀の雪を求めて、自然を友とする人々の此上ない境地となるであらふ。それはたとひ、朝日に輝くアルペンの高峯を持たぬは云へ、之を補ふ豊かな温泉と森林とを持つ北海道はあたかも歐洲人に對するスウイスの如く、日本のスウイスとして考へらるべきであらふと思ふのである。

一、交 通

形の上のみならず、氣持の方から云つても、北海道と本州とをへだてるものは津輕海峽である。此の六十哩の帶水は生物學上にブラッキストン線として著明な分界をなしてゐるに共に、北海道への旅をはむこと尠くない有様であつた。けれどもそれは近年に於ては全く過去の觀念にすぎない。青森、函館間の連絡設備は著しく改善せられて、最近翔鳳丸外二の新造船の就航によつて、更に一段の進歩を見た。今では四時間余りの平穩な航海を以て、之を繋ぐことが出来るのである。

東京を基點にして考へるならば、左記の列車がよく連絡してゐる。

中でも最もよいのは上野發午後一〇時の常盤線經由の急行であり、その次は午後〇時五五分發東北線經由の急行である。近來奥羽線にも急行列車が運轉される様になつた。上野、北海道各驛間の乗車券では、以上三線中いづれを經由するも任

上野驛發		列車種別	青森驛着	青森發	函館棧橋着	同驛發	札幌驛着	備考
午	五・五五	奥羽線普通	五・三五	三便	〇・二五	一・二三	一〇・四	昆布驛着
前	六・三〇	常盤線普通	五・三〇	七・五五	〇・二五	一・四〇	〇・七	昆布驛着
午	〇・五五	東北線急行	六・三〇	一便	九・一五	一〇・三〇	七・三〇	昆布驛着
午	五・五五	東北線普通	二・三〇	四・四五	九・一五	一〇・三〇	七・三〇	昆布驛着
午	七・五五	奥羽線急行	三・三五	四・四五	九・一五	一〇・三〇	七・三〇	昆布驛着
午	七・五五	奥羽線急行	三・三五	四・四五	九・一五	一〇・三〇	七・三〇	昆布驛着
午	七・五五	常盤線急行	三・三五	四・四五	九・一五	一〇・三〇	七・三〇	昆布驛着
午	一〇・〇〇	常盤線普通	三・三五	四・四五	九・一五	一〇・三〇	七・三〇	昆布驛着
午	九・〇五	奥羽線普通	九・五〇	急行	九・一五	一〇・三〇	七・三〇	昆布驛着
後	一〇・五五	東北線普通	一〇・三〇	五便	六・一〇	八・〇〇	六・四〇	昆布驛着

意である。或は東北地方のスキー地をも訪ねよふこする人は、奥羽線を探つて、板谷驛、大鰐驛などに途中下車をすればよい。途中下車回数は三回、通用期間は一日もある。

關西方面よりは先づ上野よりの列車を定めて後に北海道線の任意列車を利用すればよい。然し最近羽越線が開通して東京經由に比して一五六哩も短縮せられ神戸青森間直通列車が運轉せらるゝ様になつたから、之を利用する方が時間の上からも、乗車賃の上からも遙かに得策である。但し三二時間も同じ列車に乗りつゞける事に就ては各個の裁断に任せるより他に仕方がない。

北海道線に就ては、旅行の日程にもよるが、直ちに小樽又は札幌に向ふならば連絡船に接続する急行に乗るがよい。若し又青山温泉地方に向ふのならば昆布驛には急行が止らないから、一時間乃至三十分の後に出る普通列車を探るか、又は

連絡船第五便を利用する様になければならない。

尙、通信機關に就て一言すれば、東京、札幌間は普通郵便は三日、關西方面からは四日を要する。小包郵便だと尙二三日遅れる。電報は三、四時間を要する。此等は全て都市相互間であるが、鐵道沿線を離れると集配は大低一日一回であるから、之より遅れることを思はねばならない。

以上は此等機關がノルマルの情態のときに於ける目安である。吹雪の場合には列車が遅延、故障等を起すことがあるしまた連絡船が休航することが稀にある。か様な場合には自ら別である。

二、氣候と雪

スキーは雪を前提として初めて存在し得るものであり、また之をやる上に於ては殆んど全ての氣象要素と密接な關係を持つものであるからして、スキー地としての北海道を記すに當つても先づ第一に此等の事柄を明かにしなければならぬ。

降雪の初終 札幌附近の平原に降雪を見るのは一月の上旬である。累年平均初雪は一月二十九日である。が近くの手稻山(一〇二三・七m)の初雪は之より少し早く、平年一月一四日頃である。然しながら地上に積雪を見、之が引續いて消えず、所謂根雪となる時期は平均一月六日となつてゐるが、遅いときには一二月に入つてからでないと根雪を見ない時もある。スキーは大低一二月の上旬には初滑りをすることが出来る。それからづつと、雪の世界がつゞいて、春になるのであるが、其間各月平均積雪量は左表の如くである。

月	一	二	三	四	年		
平均積雪量(m・m)	一七、六	一六、三	三九、二	五七、一	四四、五	一一、四	二九、五

札幌附近で根雪の全く消え去るのは平均四月九日となつてゐる。此の頃から雪は丘陵地、山岳地へと漸次退却して行く。しかし一〇〇〇m位の山地では四月中旬まで大部分スキーの滑走に耐え得る積雪を保ち、中央高地では五月になほ乾雪を

見ることがある。降雪の最終は札幌で累年平均四月一九日となつてゐる。即ち降雪初終の中間日数は一七三日で、根雪期間は一六五日である。即ち一年中の四割五分は雪に蓋はれてゐることになる。

積雪の分布 日本列島を通じて冬季日本海斜面に降水量の多いのは既に知らるゝ通りであつて、北海道また此の例に因り、日本海斜面に積雪が多く、太平洋斜面には少い。

函館	壽都	札幌	旭川	帯廣	釧路	根室	網走	
年平均積雪量(m.m)	四、五	一九、四	二九、五	三五、四	一九、七	三、六	五、一	一三、七

右表の如く札幌、旭川等は特に多きを示してゐる。こゝ云ふ状態であるから、スキーも太平洋斜面には著しい發達を見ないに反して、札幌、小樽地方に最も盛で旭川之につぐ。函館や釧路では地形の關係もあるが前者に比して甚だ振はない。勿論山地に入ればその積雪量はずつと増えること云ふまでもない。

雪質 スキーの立場から見れば積雪量の多少よりも、雪質が第一義となる。積雪は或る程度以上あれば充分であるが、いくら多いからと云つて、雪質が悪ければ何にもならない。深さの點から云へば日本の最深雪地方は北陸地方である。が然し、雪質のよい雪は深く積ることが少いが、濕氣を含んだ雪は一時に三尺も積るものである。勿論北海道でも積雪期の初めや終りの雪はその性質はよくないけれども一月二月の候には殆んど常に乾雪が降り、且つ低い氣温と、強烈な日射の少いことの爲に、その影響を受けて變化することが比較的少い。深さもスキーを穿いて尙膝を没する様なことは、山地の谷間などを除けば極めてまれである。常に引しまつた乾雪が多いのである。雪質の最もよいのは一月中旬から二月中旬にかけてであつて、二月の下旬になると、時とすると南風の爲に雪が悪くなることがあるけれどもそれは一時的のものである。

北海道の雪質のよいことは既に傳へられてゐることであるが、實際競技の場合を除けば、鏝を使って蠟をぬらなければならぬ様なことはない。また雪の附着と云ふことも甚だ稀であつて、操縦に非常な困難を感じる様なことは年に一、二回である。また風の爲に吹きつけられて、硬くなり、不愉快を感じる様なこともない。雪がこゝ云ふ有様であるから海豹皮もあまり使はれてはゐないのである。

氣温 良好な雪質の爲には氣温が低くなければならない。然し必要以上の低温はスキー家と雖も好むところではない。

札幌に於ける毎月平均気温は次の通りである。参考の爲に新潟のそれと比較して見る。

累年月平均気温 (攝氏)

札幌	一月	二月	三月	四月	五月	六月	七月	八月	九月	十月	十一月	十二月	平均
	三・〇	三・〇	三・〇	三・〇	三・〇	三・〇	三・〇	三・〇	三・〇	三・〇	三・〇	三・〇	三・〇

新潟	一月	二月	三月	四月	五月	六月	七月	八月	九月	十月	十一月	十二月	平均
	四・一	四・一	四・一	四・一	四・一	四・一	四・一	四・一	四・一	四・一	四・一	四・一	四・一

毎月最低気温平均 (攝氏)

札幌	一月	二月	三月	四月	五月	六月	七月	八月	九月	十月	十一月	十二月	平均
	八・一	八・一	八・一	八・一	八・一	八・一	八・一	八・一	八・一	八・一	八・一	八・一	八・一

新潟	一月	二月	三月	四月	五月	六月	七月	八月	九月	十月	十一月	十二月	平均
	一・三	一・三	一・三	一・三	一・三	一・三	一・三	一・三	一・三	一・三	一・三	一・三	一・三

尙札幌の絶対最低気温は(一)二五、六度(一八九三年二月二三日)であるが、北海道全体で云へば旭川の(一)四一、〇度である。

以上の気温をスウイス・ダボスのそれと比較して見るに

累年月平均気温 (攝氏)

ダボス	一月	二月	三月	四月	五月	六月	七月	八月	九月	十月	十一月	十二月	平均
	六・一	六・一	六・一	六・一	六・一	六・一	六・一	六・一	六・一	六・一	六・一	六・一	六・一

であつて、同地の海拔高一五六〇mに對し、北海道の同高度をとれば大差はないのである。

其他寒さに關係する湿度の方面を見ても、冬季の北海道は乾燥期に當り、濕潤を感じることは融雪期を除けば稀である。

風向と風力

冬季の常風はシベリアより日本海を渡つて吹き来る西北風である。此が常に雪雲となつて、陸地に積雪をもたらすのであつて、時には數日に亘る強風が、吹雪を呈することがあるけれども平均風力は札幌附近で二月より四月

まで月平均四・四一五・九秒米である。

然しながら一般に冬季の候は曇天が多く、快晴日数は甚だ尠い。此は常に灰色の雪雲が空に懸つてゐる爲であつて、日照日數（一日中日光が照らない日）の平均は一二月の九・七日を初めとして一月は四・四日、二月及三月はいづれも二・七日、四月は三・〇日となつてゐる。此は氣分の點から云へばあまり好ましくぬものであるけれども、雪を良好に保つ上から云へばそれだけ有利なのである。しかし三月末から四月にかけての融雪期前後にはあたかもアルプスに於けるホイーン風の様、南の暖かい風が吹き、また全天雲なき快晴の日が續いて、一冬の思出の雪は、融けて行くのである。此の様な時期は、山地に於ける良雪と、その快晴の下に山岳の美を求めて、登山を行ふのである。

以上氣候の概要を記したが要するにスキーの時期は平原乃至丘陵地では、一月中旬より三月末日までであつて、山岳地では五月中は之を行ひ得るが場合によつてはゾンメルシーを用ふる方が得策のである。

更に此處に注意すべきことは、晝間時數である。一月中旬では札幌の晝間時間（日出より日没まで）は約九時間であつて、之を北陸地方に比すれば三〇分短かい。二月中旬となれば漸く一〇時間となつて、三月中旬頃には北陸地方と同じ位となり、之より後は却つて多く、五月中旬では約一四時間半となり三〇分内外長い。然しながら之は計算上の事であつて平原と、谷間とでは著しく異なるものであるが、山地旅行の際など此等の點も考慮に入れて置かねばならない。

二、スキーの發達

北海道で初めてスキーが行はれたのは一九一一年二月である。それは北海道帝國大學（當時東北帝國大學）の講師ハンス・コラー氏が故國スウイスから一臺のスキーを持つて來られたのを見て、模造品を作り、同氏自らは之をよくしなかつたので、主として書物に依つて講述してもらひ、學生が種々工夫して試みたのである。これはをそらく日本で初めてスキ

一をやつたことになるであらふ。が然しこの時は漸く穿いて歩ける位であつた様で、單に歴史的事實であるに止まる。實際にスキーが廣められたのは何と云つても一九一二年の冬オーストリアのテオドル・フオン・レルヒ氏が旭川師團へ來て講習をやつたのに初まる。その講習を受けた札幌聯隊の將校から、前記大學の人々はコーチを受けたので、レルヒ系統のリエンフェルト式に始まつたわけである。その後軍隊の方では續けて研究をやらなかつたし、また當時講習を受けた人々も他に轉ずる様なことになつて獨り大學の人々は撓まず練習を積み、また書物によつて研究を續けて行つたのであつた。そう云ふわけで同年大學スキー部が創てられてこの方、北海道のスキーの發達は一に同大學に負ふ所となつたのである。勿論當時は札幌近郊の藻岩山位に登るのが關の山であつたのであるが、練習を積むに従つて、手稻山、羊蹄山等に足をのばす様になつた。此の頃から中等學校にもスキー部が設けられ、各地で行はれる様になつた。

一九一七年同學水産専門部の遠藤博士が歸朝せられてノルウエー式スキーを傳へられてからは、兩種が併用せらるゝことになつたけれども、尙アルバイン式を基調として、ノルウエー式は、熟練したものゝ技術とせられてゐた。従つてその方面もスキー登山を主としてゐたのであつて、札幌近郊の山岳は勿論小樽、青山地方の登山も大抵同學の人達によつて先鞭を開かれたのである。此の間同學のスキーの技術は他を抜んで、非常な進歩をした。然して一九一九年頃からスキージャムプの研究が行はれ、一九二二年來には日本に初めての固定スキージャムピングヒルが設けらるゝに到つた。それと同時に大日本体育協會の全日本スキー撰手權大會がその第一回を小樽に開くことになつて、競技としてのスキーが著しく發達して來たのである。勿論一九二〇年一月から、北大スキー部では中等學校の札幌、小樽間のリレー・レースを催しクロスカントリイ・スキーイングも此の頃からすでに北海道では發達し初めたのである。

かく外來の技術を修得して、之を北海道に適當するものに仕立て上げる爲に、系統的に種々の研究が積まれたのであつて、クリスチャニアやテレマークなどの如きは、同學の人々がたゞ書物だけによつて初めて成功したのである。またそれらの人々の直滑降の如き、一般からは大學滑りとして畏敬せられてゐたのである。

今日では各地にスキー俱樂部が設けられ、また多くの競技會が開かれる様になつて、競技としてのスキーは著しい發達を見た。そして却つて、スキーの登山の方は一時あまり發達を見ない様な有様であつたけれども、晩近また此の方面は山岳界の新しい傾向に促されて研究が積まれ、北海道の最高峰たる旭岳も嚴冬一月に於てスキーで登らるゝに到つた。

今日ではスキーシーズンになると、土曜日には札幌附近のスキー場は人を以てうづまり、停車場は此等のスキーの輸送で毎列車非常の混雑を來すのである。また婦人のスキーも追々その數を増し、小樽高等女學校の如きは正科として之を課する程で其他の女學生も、スキーに親しみ、やがて婦人のスキー競技會が催されるに到るであらう。

四、主なるスキー地

凡そ適當な斜面と積雪とを持つ地では到るころでスキーが行はれる。従つて、殆んど各地にその土地の人々が好んで滑るところの斜面がある。然しながら、此等はたゞその土地の人々の爲のスキー場であつて、特にわざわざ訪ねて行く程のものではない。此處に記すところのスキー地は、かくの如き地方的の意味ではなく、北海道のスキー地、即ち日本のスキー地として、斜面や積雪の狀況は云ふまでもなく、交通、設備等の比較的整つてゐるところを云ふのである。

青山温泉附近

函館本線昆布驛附近には、青山、宮川、馬場、成田、黒澤の五温泉がある。青山、宮川の兩温泉は山に近いただけスキー上最も有利な位置を占めてゐる。馬場温泉は更に山地にあるけれども冬季は營業してゐない。他の二温泉は斜面に遠いだけにスキー地としては未だ認められない。

昆布驛は函館驛より六時間余札幌驛より四時間余の距離にあり、同驛前には此等各温泉への案内所が夫々設置してある。いづれも驛より四キロ乃至六キロメートルの範圍に在つて、青山、宮川兩温泉へは毎日主要列車に對して送迎馬車を往復せしめてゐるから、荷物を之に托して、雪の情況によつては稍上りではあるが、軽い足ならしの意味でスキーを用ふるがよい。兩温泉への順路は（參謀本部五万分之一地形圖、狩太、岩内圖幅）昆布驛東方の踏切をこえて、尻別川の橋を渡り

一路北へと辿る。小阪を登つてテレースの上に出れば、稍右手に、西南面に大きな谷を開いてゐるので、すぐそれと別る。ニセコアンヌプリを目指して、此の丘陵地を進むのであるが、地圖の二〇二米附近で成田、黒澤兩温泉への岐路となるからして之を右にとることを注意しなければならない。之より先はひどい吹雪の後でない限り、馬橋道は一條に、青山温泉へと導いてくれる。青山温泉はニセコアンヌプリの畔に立てられてゐる。宮川温泉へは、川へ下らずにその手前で左にさると、すぐ近くである。

青山温泉旅館は不老閣と云ふ。百五十名位の収容力がある。抑も此の地がスキー。ゲレンデとして初めて認められたのは一九一九年二月北大スキー部員がニセコアンのスキー登山よりの降路を此の方面に取つたのに初まり、その地形と雪質と、温泉の位置との優れてゐるために、爾來毎年北大スキー部が一二月下旬、一週間乃至一〇日間合宿練習をするに到つたのである。今日では旅館はスキー客の取扱に最も慣れ、毎年その設備を改良して、乾燥室等も完備の域に近い。今年には斜面附近に休息用のヒュッテを作り、またジャムプ臺をも築造した。

此の温泉を中心としてのスキー場は、温泉の前のニセコアンヌプリを渡つて前の臺地に出でニセコアンヌプリの前面八三九、三米の斜面へ平地滑走約一キロメートルで以て達し得られる。此の斜面は相當廣く、且つ長く、その下の方は平になつてゐるので、練習上甚だ都合がよい。傾斜角度も適度であるが、特に急な斜面もあるし、また谷を挟んだ曲折の滑走も出来る。更に森林滑走の練習を好むならば八三九、三米の三角點へ向つて登れば、針濶混滑林が得られる。ニセコアンの雄姿を背に、前面に展開する景觀を云へば左方に羊蹄山の端正な、急峻な、如何にも堅硬な雪を頂き、その中腹に適度の森林を持つてゐる姿が指呼せられ、正面には昆布岳の横に平たい山容がつよく、此を超えて彼方には著明な火山、有珠岳のドームがその特有の形を以てあらはれるのであるが、天候次第である。

青山温泉の他のスキー場は、ニセコアンヌプリの右岸臺地の急斜面である。此の附近では主にジャムプの練習が行はれる。**時期**は、此の附近は何も云つても北海道の多雪地であるからして、早いのであるが、雪が落ちついて細かい障害物がかくれるのは一二月にはいつてからである。積雪量は年によつて異なるが一月中旬からは間違なく滑れるであらふ。それからづゝ引つゞいて三月中は充分に滑走を楽しむことが出来る。四月の上旬に於ても尙スキーを行ふことが出来るけれども、此の頃はむしろ、此處を中心とする山岳のスキー旅行がよいのである。

宿泊料は二圓五十錢内外、温泉の浴室は川岸に臨み相當廣い。鐵分を含む炭酸泉である。最近自家發電の電燈を備へた。旅館には貸スキー等はない。一般に北海道のスキー地では貸スキーの如きは未だ設へてはない。此種のスキー地を訪ふ程の人は全て愛用のスキーを持つてゐる筈であるから。但し、行く行くはその修繕、破損等に備ふる所あらねばならない。一二月下旬及び三月下旬は北大スキー部の合宿が行はれるため、非常に困難するから、豫め照會をしてをくとよい。日用品罐詰類は販賣せられてゐる。郵便局は昆布市街地にある。一日一回の集配である。電信は別便配達でなければ、郵便と共に配達される。醫師及び薬局は昆布市街地にある。寫真用品は倶知安町まで出なければ得られない。

宮川温泉は青山温泉の上流三、四百米のところに在り、その收容力は五〇名内外、スキー場、時期、宿泊料其他の點に就て萬事大同小異であるから、重ねて述べない。練習の點より云へば前者より稍不便たるを免れない。

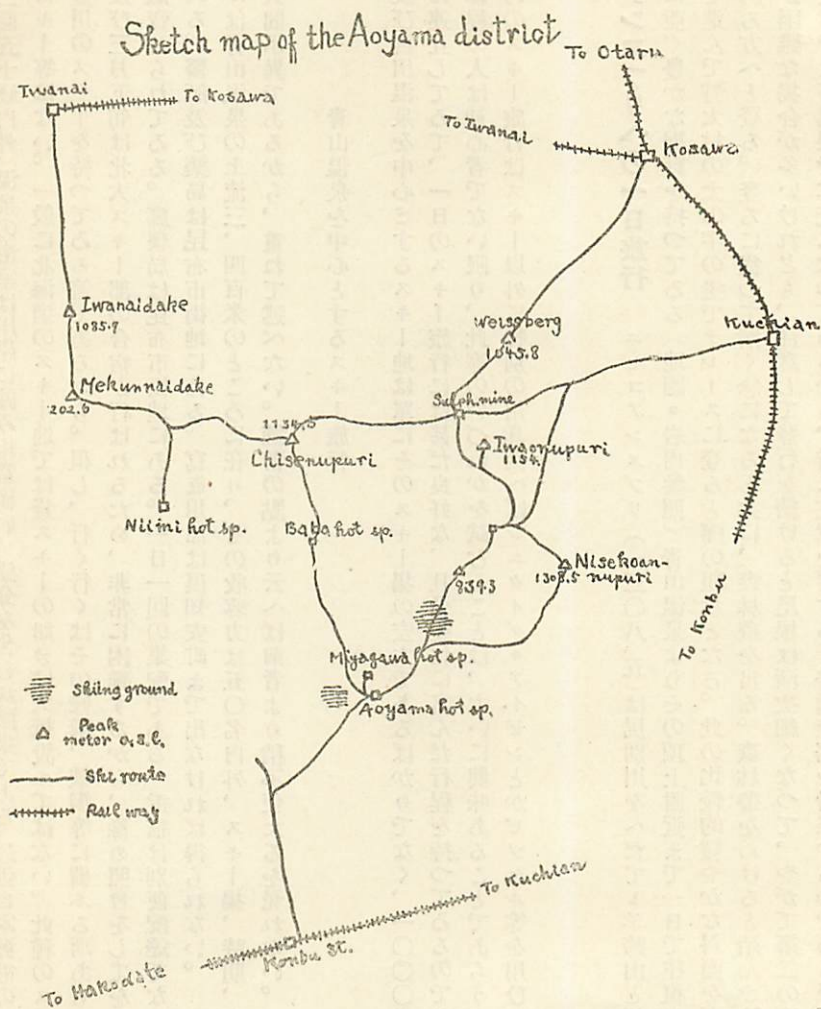
青山温泉を中心とするスキー旅行

青山温泉及び宮川温泉を中心とするスキー地は單にそのスキー場の宏大であるばかりでなく、一〇〇〇米内外の山地がその東北方に連互してゐて、一日のスキー旅行には甚だ良好な、且又變化に富んだ行程を持つてゐるのである。であるから青山を訪ふ程の人は初心者でない限り、此等のいづれかを試むることは、大いに興味あることであらうと思ふ。以下に述べるところのスキー旅行はスキー以外に特別の用具例へばシユタイグ・アイゼンとかピツケル等を用ひない範圍での話である。

ニセコアンヌプリへの一日旅行

ニセコアンヌプリ(一三〇八、五)は尻別川をへだて、羊蹄山と相對する火山であつて同山に亞ぐ豊かな裾野を持つてゐる(地圖・岩内参照)青山温泉よりその頂上附近まで一日で往復出来る。香川團體の開墾地を進んで狩太村の太の字の邊でテレースに登ると樺の粗林となる。此の比較的緩やかな斜面を漸次、等高線に標高の數字ある方へと登る。登るに従つて漸く急になると共に、森林帯を出る。森林帯をぬけると殆んど法則的に雪は硬化して角付が困難な場合が多いけれども、注意して登行を続けると尾根は漸次細くなつて、やがて第二の峰にたどりつく。此處より頂上までは椿尾根で雪庇になつてゐるから、特に注意を要する。普通登路を滑降するのであるが、樺の粗林地が

Sketch map of the Aoyama district



此の旅行に於ける最大の享樂を提供するのであつて、森林帶の上部限界より麓の平地まで、雪のよい時には長い長い一續きの滑降をなすことが出来るのである。一氣に下ることを惜しむならば林中粗開の地をえらんで一時間位は充分遊ぶことが出来るし、歸りの平地も夕方であるから稍下りの氣持ちのよい平地滑走をやる事が出来る。他のも一つの登路は、八三九、三米の峯を経て北西斜面を登るのであるが、此の斜面は全く裸出したブラノスロープであつて、直ちに頂上に達し得られる利點はあるが、あまりに急なので愉快な滑走は得難い。

イワヲヌブリへの一日旅行

イワヲヌブリ(一五四米)はニセコアンと相並んだ、小さな火口原を持つて居る山である。前記の八三九、三米の峰から新山精練所の上方を通りニセコアンベツの水源を迂回してその麓に達することが出来る。ニセコアンベツは新山精練所附近で温泉が湧く爲、之より可なり上方でないで渡ることが困難である。火口原に達するには急な斜面を登るのであるが、火口壁の最高點へ達するには、スキーでは無理である。一體に此の附近は巨岩が累々にしてゐて、稍高山的景觀を呈してゐるが、長い直滑降などは味はれない。青山より一日に充分往復出来るのである。

青山温泉より倶知安又は小澤へ

前記兩山の鞍部を東北に進路をとり五九四、九米の三角點の方へ出ると、岩尾登礦山と倶知安町との間に架せられた索道線に交叉するから、之を傳ふて下るのである。此のコースは滑降上興味がないことはないが青山より倶知安に出る、むしろ交通上のスキー路である。途中ニセコアン又はイワヲヌブリに登ることも出来る。

岩尾登礦山へ達するにはイワヲヌブリの麓より、小イワヲヌブリを西方に迂廻してその谷を下る間もなく、積雪の上に煙突を見出すことが出来る。この礦山を経て倶知安に出ることも出来るが興味は尠い。それよりもワイスベルヒを経て小澤に滑降する方が面白い。若し乞ふて礦山の合宿に一泊を許されるならば此の行程は甚だ餘裕あるものとなる。ワイスベルヒとはイワヲヌブリの北方一〇四五・八米の峯を指すのであつて、その小澤方面に派出する廣い尾根は僅かに白樺の散點する他凡て雪白の裸出地であつて、若し良好なる新雪が積つてゐるならば一氣に小澤村まで飛ばすことが出来るのである。岩尾登礦山はケーブルによつて倶知安町より物資を運び、また電話の設備もある。硫黃礦山である。

チセヌブリへの一日旅行

青山温泉を出て小泉農場のテレースに登り、此の開墾地を進んで熊本團體を経て馬場温

泉に達する。こゝまでは殆んど平である。此の附近は潤葉樹の粗林で、温泉の湯氣は容易に林中に見出せる。温泉には多分人は居ないであらう。此處から澤の左岸の林中に登り初める。大體等高線標高のある附近を進んで行くとやがて森林帯を出て、正面に缺頂圓錐形の峯を仰ぐ。峯の手前の樺林で、滑降を樂しみつゝ晝食となるであらう。此處からはコンヴェツクスの可なり急な斜面を廣い頂上（一一三四、五）へと登るのであるが、雪は大抵の場合硬化してゐるが、嚴冬期ではスキーを用ひ得られない様なことはない。

普通登路を滑降するのであるが、森林帯までは可なり長い直滑降が出来る。林内はスラロームでぬけるのもよい。ニセコアンの往復と、興味の上からも、勞力の上からも大差はない。前者よりは頂上に達し得る機會は多い。

チセヌブリよりイワヲヌブリへ チセヌブリのドームを東方に降り一〇八二米の無名山を越えて、イワヲヌブリの南方に出で、新山精練所より八三九、三米を経て青山温泉に還るコースは、春の日永の快晴には、また適當な一日旅行である。

目國內岳を経て岩内へ 此のコースは春でなければ困難であるがチセヌブリより郡界線の尾根傳ひに目國內岳（一二〇二、六米）を経て岩内岳（一〇八五、七米）に到り、岩内町方面へ滑降するのであつて、青山温泉又は岩尾登礦山より春期一日で達し得られる。また新見温泉より目國內岳に登ることも出来る。

小 樽 市

人口一〇万を超える都市で、然も市中に充分な滑走をなし得るところは世界にもその類が少い。第一回全日本スキー選手權大會の行はれた地として知られ、街は海に臨んで背後に山を負ひ、起伏に富んでゐて、綠ヶ丘、聖ヶ丘の二スキー場を持つてゐる。小樽、南小樽、小樽築港の三驛があるが、小樽驛が一般には最も便利である。函館より約八時間、札幌よ

り一時間餘で達する。旅館は北海屋ホテル、越中屋、林旅館、加賀屋等多數ある。但しスキー客の爲に特に理解ある待遇と設備とを期待することは稍無理である。市内の交通は馬糞と自動車がある。各學校其他の團體に於てはスキーは甚だ熱心に行はれてゐる。スキー俱樂部もあり、スキー家の爲に便宜を計つてゐる。スキー製作所、スキー用具販賣所は相當信用あるものもある。従つて用具の購入、修繕等到着して便利である。その主要なるものは、稻穂町大通梅屋運動具店、同アサヒヤ運動具店等である。然しながら小樽市は港として、商業都市としての色採が濃厚であることを忘れてはならない。

北方日本海に臨んで冬季北西の常風を受け、積雪量、雪質は札幌と大差ない。

緑ヶ丘 は市の西部に在り。海に面して一の廣潤な斜面を持つてゐる。從來スキー競技會の中心をなしたところである。聖ヶ丘は市の中央に在り、此又練習に充分なる斜面を有し、小樽スキー俱樂部は夜間の練習に便するため、高燭光の電燈を設備してゐる。然しながら兩スキー場とも新雪の朝でない限り、處女雪に雪煙を上げて快走する大なる直滑降をなし得ることは困難である。それは、滑走者が非常に多いのミ、斜面が變化に乏しい爲であるが、此は大都市として止を得ない。残念なことにはジャムピングに適當なる斜面をその近郊に有し乍ら、今日迄未だ固定スキージャムピングヒルの築造を見ないことである。之が爲に同地スキー家は最近著しい進歩を顯せる此のジャムプ競技の練習に甚だしい不便を感じてゐる。

綠ヶ丘の南方に天狗山（五三二、五米）がある。所々雑木の粗林と落葉松の密林が點在する。概して急な斜面を持つてゐる。變化に富める各種の技術を行ひ得る點に於て、自由を好むスキー家は此の方面まで足をのばす方がよい。於古コノ發川ガハの右岸斜面を登るのである。

望洋山 市の東南部五四八、四米の峯を指す。小樽毛無とも呼ばれてゐる。潮見臺より登る。此の方は天狗山より緩斜であつて、長い滑降を續けることが出来るのである。海に近いのと、全山無立木の爲に雪は硬化し易いけれども、新雪が適當の深さに積つたときに於ては、此の斜面は最もすばらしい滑走を味ふことが出来るのである。札幌より一日を費して此の地に遊ぶのも亦不可ではない。

遠藤山と毛無山 緑ヶ丘附近高等商業學校横の地獄坂を登り伍助澤より、鹽谷川の上流に出でその左岸をつたつて丸山と遠藤山との鞍部に出で、その尾根を南へ、七三五、三米の頂に達する。此の峯は遠藤理學博士がノルウェーより歸朝せられ一九一七年冬初めて此の方面のスキー滑走に好適なることを紹介せられしより呼ばれるもので、西北方一、五キロメートルに、六五四米の毛無山がある。此の間の鞍部は風衝強く、*avalanche* をなせること多し。毛無山の東面は稍急。同峯より鹽谷及び蘭島の二方面へ滑降し得。頂上北面の大斜面は雪質良好なれば長い直滑降をなし得る。小樽より遠藤山を経て毛無山に達し、鹽谷、又は蘭島に下りて夕方の列車をとらへ、小樽に還ることが出来る。また丸山の東斜面より直接小樽に滑降することも出来る。遠藤博士等により推稱せられた此の地方も近年植樹が生長して滑走に多大の支障を與へるため今日ではあまり多くを期待し難い。

鹽谷又は蘭島驛に下車して上記の道を行くことも出来るし、小樽方面よりは水源地奥の大曲より於古發山に登り、遠藤山に到ることも出来る。

余市岳の登路 標高一四八八、一米の余市岳は小樽市より二泊して往復出来る山岳で、鐵道沿線からはかくれてゐるが良好なスキー山岳である。小樽より達するに二路ある。一は前述の望洋山より樺の純林の中の經路つたひに六五五米を經て余市川畔盤ノ澤に出るのミ、他は水源地の奥より小樽峠を越えて同地に出るのである。その間人家なく且つ冬季間は交通全く絶える。小樽より盤ノ澤まで一日行程である。盤ノ澤は寂しい開墾地で旅館などはない。自炊の用意をして小學校にでも宿泊を乞ふのである。五四一、〇米の標高點よりその尾根を登り、九八九、五米、一一一八米を經て尙起伏を重ねる尾根をつたひ、國境線にて第二の峯に達する。頂上へは稍南に廻つて登る。此の附近は大抵雪は硬化してゐる。途中までは潤葉樹の老大木がある。朝里岳に續く尾根は非常に狭く且つ急で雪庇になつてゐるけれども、此の狹路を下れば朝里岳の平潤な高原に出る。春なれば朝里岳に廻ることも、また阿女嶺岳に寄り道することも出来るし、また白井岳を經て

定山溪方面に出ることも出来るけれども此は容易な道ではない。盤ノ澤より頂上まで往復一日である。なるべく早朝に出発しなければならぬ。歸路は往路に同じい。札幌よりも小樽まで汽車を利用して同様の登山をなすことが出来る。

札 幌 市

北海道の首都たる札幌は政治、學術の中心地をなすのみならず、その西方に連互する優秀なスキー地と、ウインタースポーツの設備、スキーの技術及びその研究等に於て他に比肩するものゝない地位を占めてゐる。東京より三三時間を要する。旅館は山形屋、中村屋、靜岡屋、越中屋等多数あるが、スキー家の爲に特に理解ある待遇と設備とは望まれない。市街の交通は電車と馬構、初めて北の國を訪ふ人は吹雪の夜、馬鈴をびどかせて構を馳る情緒をも味ふべきである。市内各學校、團體に於てスキーは熱心に行はれてゐる。スキー製作所、スキー用具販賣店も多数あり、購求、修繕に用を欠かぬ主なるものは南一條通スタンダード會社、小谷運動具店等である。北海道帝國大學文武會スキー部がある。山とスキーの會はスキー及び山岳に關する照會に應答する。

札幌のスキー地は西郊の圓山及び三角山の二であるが、兩者は相連繫して、緩急種々の斜面を提供する。

圓山 スキー場に到るには市街電車南一條線西二〇丁目にて降り、直ちにスキーをばいて平地滑走一キロ餘で圓山南麓に達する。此の第一の斜面は最も多くスキー家の集まるところで、その附近に札幌市設休憩所がある。初心者でない限り此の常に踏みつけられた斜面よりは、その續きの奥の方へ圓山の西方の斜面を選んで練習するがよい。望み通りの傾斜面が得られる。

三角山 スキー場は南一條線の終點で降り、札幌神社の北方を進むのである。三角山及び圓山は共に名稱通りの形を持つてゐる。街路より明かに認識し得る。三角山スキー場の斜面は非常に廣闊で同山頂よりの急斜面と、麓の緩斜面とを併せ有し、初心者にも、熟練者にも甚だ好都合である。三角山の北方に派出する尾根に東面して、北大スキー部所屬のジルバ・シヤンツエ (Silber Schanze) がある。此は東洋に於て初めて建設せられた固定ジャムブ臺であつて、その規模また他に類を見ず、アブローチ約六〇米、ランディング八〇米、その最大傾斜三五度である。又三角山東方に北面して北海道山岳會

所屬アルファシヤンツエ (Alpha Schanze) がある。規模前者に比して小、練習用に適する。スライドの下は小屋になつてゐて、シーズン中飲食物を販賣する。圓山の背後を通じて三角山と圓山との兩スキー場は相連る。

三角山より北方琴似方面に派出する尾根は良好な滑定をなし得る斜面に富み、その末端東西の長いコンケーブの斜面はシルバースロープと呼ばれてゐる。此はむしろ琴似驛より達するを便とする。

總じて此等のスキー地は土曜、日曜に全市のスキー家を容れて尙多大の餘裕を存し、各その技に應じて或はジャムプにスウイングに充分の快を追ふことが出来る。市内電車も亦スキー家に對して特別の好意を持ちつゝある。

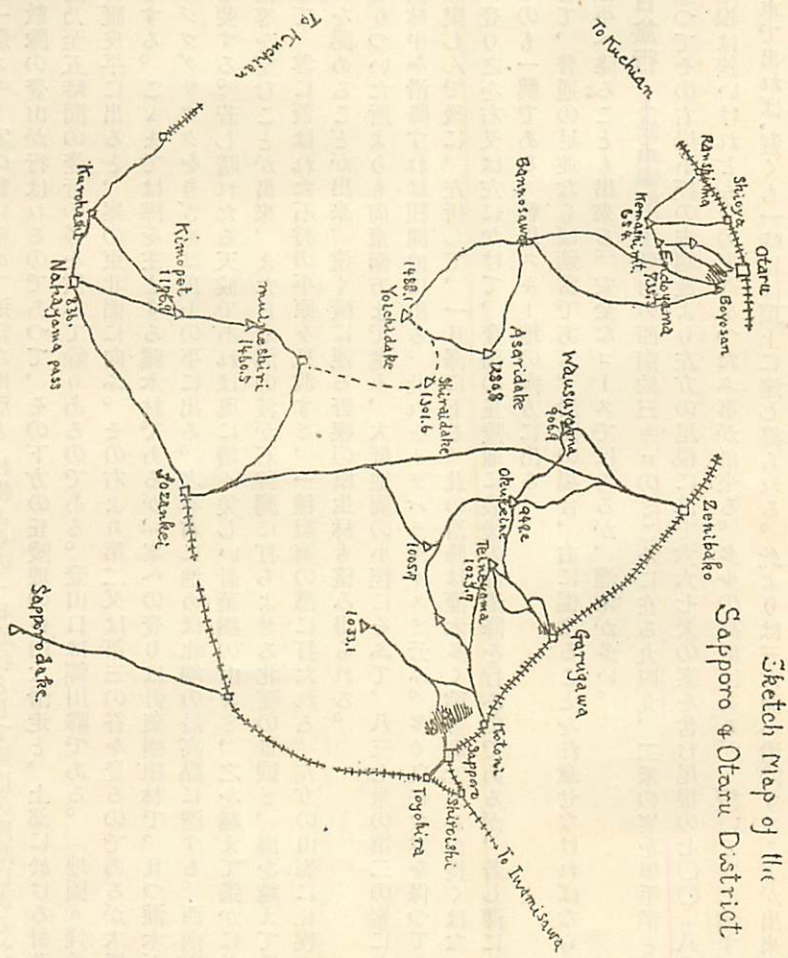
尙適當なる馬を借入れる事が出来るならば、スキーエーリングをなすことが出来、また、三月雪質硬化して、南風強く吹くときにはスキーのセイリングをなし石狩平原を滑走することが出来る。

札幌市内には三個のスケートイングリクあり。一は市の南部中島公園に在り、他は北大及び北海道廳構内に在るもので後二者は各そのスケート部員の専用リンクであり、中島公園のは札幌スケート協會の管理に屬してゐる。一二月中旬より二月中、手入をしてゐる。いづれも乞ふて滑走の快を味ふことを容れられるであらふ。前記三者は各アイスホッケーチームを持つてゐる。

輕川スキー地 札幌より十數分、小樽より五十分で輕川驛に達する。驛前の斜面は初心者練習に適する。無線電信局の横より入る。その斜面を登りつゞければ所謂千尺高地に達するのである。手稻山の前山をなす丘陵の連恆であり、緩い傾斜の長い滑走をなし得る。四〇六米、五〇一米四二七米及び一一九、五米の點を連環する輕川澤を廻る尾根の登降を大曲と俗稱して良好なる半日のコースをなす。驛前に旅館あれども宿泊は札幌を便とする。輕川温泉は旅館として良好であるが、スキーに對してはまだ特別の設備をしてゐない。

札幌を中心とするスキー旅行

手稻山の一日旅行 札幌を中心とする一日旅行として、先づ第一に推すべきものは此の手稻山 (二〇二三、七米) の



登山である。此の山は一般スキー家の爲に極めて適当な地形と、札幌よりの一日旅行として適度の距離にあるために、積雪期間の日曜日には必ず数隊の登山が行はれるのであつて、その下方の丘陵地の自由な滑走と、上部に於ける針葉樹林中の廻轉滑降とは、四時間乃至五時間の登行の勞を償ふて餘りあるのである。登山口は輕川驛である。(地圖。錢函) 前述千尺高地より尾根傳ひに雁皮平に出ると、峯の東北面に向ふ。その右より第二又は第三の谷を登るのであるが大低その斜面にこりつく下で食事をする。こゝまでは樺を主とする雜木林であるが、峯への登りは針葉樹粗林で、且つ灌木がある。雪にもよるが約二時間のジツグサクをきざめば頂上の平に出る。之を右に進めば北端の最高點に達する。西南面は絶壁になつてゐるから注意を要する。若し晴れたる天候であれば奥に續く美しい針葉樹の山々を、之を越えて遙かに羊蹄山、キモベツ岳、ムイネシリ岳等を望むことが出來、また日本海の波が石狩灣に打ちよせる北暎の景觀を、海を越えて増毛山塊の重疊を見る。更に轉じて、雪に蓋はれた石狩の平原を見渡すと、一種寂寥の感に打たれる。左方の山影に札幌の市街が、柵引く黒煙下に在るのを認めることが出來、遠く横に連る野幌の原生林も望み得られる。

滑降は頂上の平に登りついた所よりも尙東南方まで進み、大低地圖の小徑にそふて、八三七米の第二の峯に向つて下り之を右に迂回して、樹林中を滑降すれば粗開地に出る。此れをネヲバラダイスミ云ふ。多く良好な雪を保つてゐる故、餘裕あれば此の直滑降を楽しんで後に、左折して、一旦澤に下る。此の滑降は灌木多く稍苦痛であるが長くはない。澤より再び前面の千尺高地に登り之を右又は左にかけて、登路の丘陵地に最後の直滑降を行ふのであるが、若し澤に出でて、木橋道があれば之を下るのも一興である。輕川スキー地の南方に出る。

以上一日の旅行として、普通の足並ならば適當である。滑降の場合、右に偏することを注意せなければならぬ。八三七米の峰の手前で雁は平へ降ることも出来る。安全なコースではあるが、灌木が多い。

奥手稻方面の一日旅行 (錢函圖幅) 手稻山の西南約三キロのところに在る九四九、二米の峯を奥手稻と呼ぶ。錢函驛に降り、錢函川を溯つてその右岸小徑の末端邊より左方の尾根に出で六六七米の峯を含む尾根の七〇〇—八〇〇米位の邊に登りつく。此の尾根は狭いけれどもその東寄をつたふ事が出来る。多少の高低はあるが、續いて峯に達することが出来る。札幌を一番の汽車で出れば、遅くも一時には頂上に達し得られる。此よりは三方面へ滑降することが出来る。第一は西方に下つて右折し八三八、七米の頂上近くをかすめて、鑛山事務所の北方に下り、九〇六、三米(遙山と呼ぶ)に登る。此



中山峠



奥手稻山附近

の登行は稍疲勞を感じる。之より八四四米を経て、稍左に迂回して左岸の尾根を下り、錢函川に還るので、遙山附近の長い壯快な直滑降を樂しむのが目的である。第二は、瘠尾根傳ひに手稻山の北方をからんで輕川へ出るものである。第三は一度下つて南方九四九米に登り、發寒川を圍む尾根を阿部山に出で、瀧ノ澤に出るのであるが、此を一日に逐行するには十分なる体力、技術、食料の他に、良好な天候と雪質とを必要條件とする。頂上より登路を下ることは滑降上、殆んど價値がない。總じて此の方面は針葉樹林と、その間に在る純白の斜面の美とにその特長を持つてゐる。此の種の地形は白井岳、朝里岳方面にまで續いて、實に絶好のスキー地をなすのであるが、上述の範圍以上は宿泊しなければ充分の享樂をすることが出来ない。然も此の附近には一時的に伐木小屋が作らるゝことを除けば未だ一のスキー小屋もないので、甚だ残念な次第である。

札幌岳への一泊旅行

(地圖・定山溪)省線白石驛より分岐する定山溪鐵道を利用する(札幌市街電車、豊平線終點より數丁にて同鐵道豊平驛に達する)土曜日の午後より出でて、麓舞驛に降り、盤ノ澤奥の農家に到り一泊を乞ふ。盤ノ澤瀧ノ澤との間の尾根を登つて頂上に達するのであるが相當急である。頂上(一二九三、二米)は西及び南に緩斜で東北は滑降不能である。春期には狹薄山、空沼岳方面にまで足をのばし得る。登路又は定山溪方面に滑降することが出来る。後者は定山溪鐵道の終列車を促ふるにいそがねばならない。(山とスキー第二一號参照)

中山峠を中心とするスキー旅行

定山溪温泉の奥、石狩、後志の國境附近の連山は優秀なるスキー地として、推稱すべき所である。札幌方面より俱知安平原に出すべく此處を越える所の國道は、此處に中山峠をなして、その頂上に一つの驛遮が設置せられてゐる。然しながら此の兩者間の交通は今日幹線に連絡する輕便鐵道の敷設によつて、驛遮は殆んど利用せられずに放棄せられてゐる現狀であつて、唯秋の紅葉と冬の雪を求めて此附近を訪ねる人々にとつて、唯一の小屋として重要な役目をなしてゐるのである。然して此の小屋に宿泊することによつて、キモベツ岳、ムイネシリ岳等の長大良好なるスキー登山をなし得るのであつて、附近の緩急様々な長い斜面と、此處に成立する針葉樹と、樺林の美觀、並びにその滑走期間の長いこと、加ふるに一日行程で全く人境を去つて、充分にスキー生活に沈潜し得る等の點に於て、他にその類を見ないのである。

札幌よりは前記の定山溪鐵道を利用し、定山溪より國道沿ひに驛遮に達する。勿論積雪期間は人馬交通の跡はない。札幌

幌より一日にして達し得るが、食料、防寒具を携帯するの要ある爲、稍強行たるを免れない。驛遞の建物は、四室平家であるが道の右側に容易に見出され得る。雪に蔽れて居る様なことはない。食器、寝具等充分でないから、此等はなるべく携帯する要がある。勿論年を通じて番人は居ない。此の驛遞は黒橋驛遞管理人の管理に屬するもの故同地に照會すれば炊事、雑用の爲に人夫を上げてくれる。秋なれば水を得られるが、冬は雪をとかさなければならぬ。此處に根據を置いて、附近の斜面を滑れば、二日や三日位は飽きることはない。若しまた遠出を望むならばキモベツ、ムイネシリ岳に足を延せばよい。道は國境の尾根を傳ふ解り易い道である。ムイネシリより豊羽鑛山元山を下ることが出来る。反對に元山より之に登ることも出来るのである。此のときには札幌より定山溪を経て元山に到り一泊の要がある。またムイネシリ、キモベツより薄別澤に下り定山溪に出ることも出来るのである。更にまたキモベツよりは群馬團体又は黒橋に下ることが出来る。之を反對に、同方面より登り、或は中山峠に出でムイネシリに出づることも出来る。實にかく、此の方面は幾多の好なるコースを持つてゐるのである。峠より黒橋方面に下れば脇方に到つて東俱知安線に乗れば俱知安を徑て札幌に歸ることが出来る。従つて逆に之の方面より入れば、黒橋にて人夫を傭入れるに便あると共に、歸路を定山溪に下れば、同温泉に一浴して札幌の人となることが出来るわけである。

雪質は一、二月が最も良好であるが、四月上旬でも充分滑降を楽しみ得る。中山性スキー地として冠たる地方である。

五、主なる山岳の登路

前項に記したスキー旅行は主として中山性山岳を含むものであつて、此には普通スタイグアイゼンとか、ザイルを用ひないで、主としてスキーの滑降のみを享樂する範圍で登り得るものである。然しながらそれも時期によることであつて、青山温泉地方の山岳は三月末以後は雪質が硬化して、スキーではその頂上を窮め難いことがある。而しまた此の様な時期には冬期よりもその日程をすつと延長し得る利點をも生じてくるものである。こゝに述べるものは、スキーの滑降を樂しむのみならず、高峯の登攀そのものをも興味の中心として、時にはピツケル、ザイル、スタイグアイゼン等の冰雪登攀用

具を使用しなければならぬ場合がある。従つて此種の登山旅行を試むるものはスキーに熟達してゐる外に、冬季の登山にも相當の經驗を積んだものでなければ軽々に計劃することの危険なものである。

北海道にはまだスキーで登られない山頂が幾多ある。否夏期に於ても登路の明らかなでない山巔が多い。此は登山の發達が充分でないのと、その地形、地被物に容易ならぬ特長があるからである。それで却つて夏期の登山よりも冬季のスキーを利用する登山の方が遙かに有利で且つ容易である場合もあるのであるが、此は技術に達したものと見地で、冬季、夏期を比較すればやはり前者に危険率の多いことは免るべからざる事實である。

さて此處には既にスキーを利用して登山せられた事のある二三の高山性山岳に就て大要を記すこととする。

羊蹄山 俱知安平原に聳立する獨立休火山で標高一八九三、〇米ある。函館本線車窓より仰ぎ得る富士型山容は、北海道旅行者にとつて著名なものである。登路は俱知安又は比羅夫である(地圖・俱知安・留壽都)前日比羅夫驛前の旅館に泊れば、早朝の平地滑走に於て俱知安よりも有利である。半月湖畔に蝦夷富士登山事務所がある。冬は閉する故之を利用するには俱知安村なる同會に豫め交渉するの要があるが、必ずしも此に宿泊するの要はないと思はれる。大体に於て夏路に沿ふて登るのであるが六合目までは針澗混淆林の中を行くのである。六合目以上は傾斜の急な完全な裸地であつて、八合目附近からは偃松の枯枝に雪が塊つて、はけしい凸凹をなしてゐる。か様な有様であるから時期、天候にもよるが多くは雪は硬化してゐる。即ち嚴冬期ははけしい風衝の爲に、スキーの角付を拒む硬雪となり、春期には強い日照の爲に堅雪乃至表層が厚く氷こなつてゐる。か様な場合にはスキーをスタイグアイゼンに代えなければ到底困難である。上方に登ると共に、横に浅い縦には峯から麓まで眞直に走つてゐる谷が、眼下に見えて且つ傾斜も著しくなるから、注意しなければならぬ。一〇〇〇米以上も、眞直に急な斜面を見をろせる様な所は此の山を除いては珍らしい。小屋のある九合目は小さな平をなしてゐる。小屋は全く閉ざれてゐるから、豫め秋から準備して置かなければ使用し得られない。火口壁の最高峯に達するには、どうしてもステップを切らなければならぬ。火口は大きくはないが完全な摺鉢型をしてゐる。スキーを用ひて頂上に達したことはあるけれども餘程のチャンスが與へられなければ無理である。滑降は大体登路による。若し落着いた適量の新雪が惠まれるならば、此の裸出した大斜面のステムボーゲン乃至スラロームは極めて幻惑的なものである。六合目以下は樹林の滑走である。非常な深雪でない限り、相當足が揃つて居れば、比羅夫より一日の往復はさまで困難で

はない。然し早朝六時以前には出發せなければいけない。

登山の時期は一概には云はれない。一二月には雪が深くて着かず、日も短いから無理である。要するに、前一週間及び當日の天候次第である。新雪の直後には、裸出地で雪崩の危険が多い。「山とスキー第六號参照」

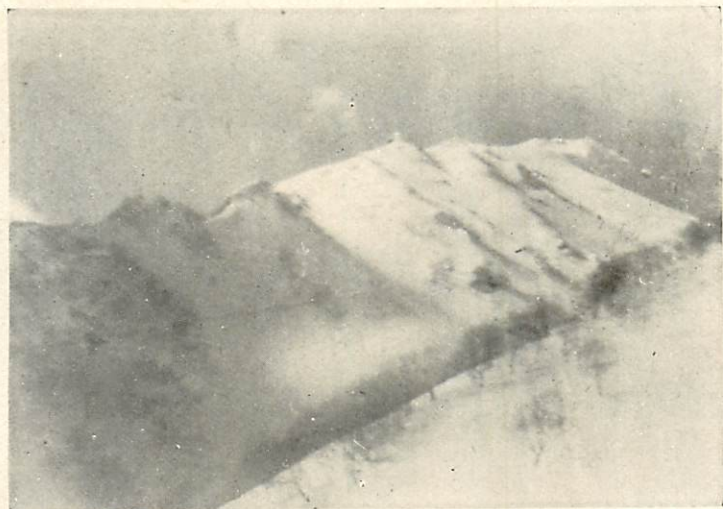
アシユベツ岳

夕張山脈中の一峯であつて、根室本線山部驛より一日にして往復し得る山岳として、その山容の尖鋭な爲に知られてゐる。標高一七三六、九米（地圖・山部）山部驛に降り驛前の旅館に泊るか、出來得るならばその日のうちに殖民區劃地二十五線の奥まで行き農家に宿を乞へば、一日の登降は樂である。登路は二十五線を眞直に尾根に登り、一〇八八米まで達すればポントナシベツをへだて、鉢盛山から夕張岳へ續く岩壁の壯麗に正面するこゝが出来る。之より西北に尾根を傳ふて峯に向ふのであるがこゝまでは針濶混濬林であつて相當急である。之から上は樺を主とする樹林である峯頂近くで稍左に廻り、ポントナシベツ澤の上より、峰を南面より登る。北面はユウフレ澤に面する絶壁である。多くの場合スキーは樺林のつくる所で棄てなければならぬ。此の附近は地圖で想像するより以上に岩壁の發達した壯年期の地貌を呈してゐて、その積雪期の壯觀は立派なものである。尖鋭な峯は燕岳方面より見た槍ヶ岳に比すべきものであるが、之の山容はユウフレ澤より夫婦岩の西方を廻つた所より初めて望まれ得るので、此のコースは澤傳ひが非常に困難なため冬期は容易でない。従來の經驗では三月より四月上旬にかけてがよい。「山とスキー第一號第三八號参照」

中央高地のスキー登山

石狩川の水源をなす中央高地は北海道本島の最高峯旭岳（二一九〇、三米）を始め、二〇〇〇米内外の高度を以て聳立してゐるのである。此の地方は原生針葉樹林の最も壯觀を呈するところであつて、特に大雪山彙の大火山は、岩石嵯峨たる峯頭を群立してゐるのである。然しながら此の地方は尙未だ開けず、一九二四年夏漸く北海道山岳會が旭岳及び黒岳附近に登山小屋を設置せる外、何等設備なく、特に冬季の登山は未だ充分に行はれず、各山岳の登路の如き未知のもの尠くない。

大雪山彙に入るには現在二つの登路がある。一は忠別川上流よりするものと、他は石狩川上流よりするものである。前者は忠別川上流に於て松山温泉を最終人環となすのであるが、温泉は狭谷中にあつて、冬季は此の絶壁の登攀が困難であるからして従來はユコマベツの右岸清水澤との間の廣い尾根を傳ふて登つてゐた。此には富良野線美瑛より全一日の平地滑走をなして美瑛忠別に達し此處にて米増及び人夫等の準備をなし、更に翌日はユコマベツを溯つて伐木小屋に泊し、



蘆 別 岳



蘆別岳連峰の一部

之を根據として、旭岳に向つたのである。

石狩川上流よりするものは上川線終點より平地滑走して層雲別温泉に達し、此處を根據として黒岳、其他の諸峯に登り得るわけである。兩温泉とも驛遞に指定せられ、冬季も開業はしてゐるけれども、豫め照會するを安全とする。また旭岳黒岳の登山小屋を利用すれば、更に廣く足を延ばし得るわけであるが、全小屋は未だ完全なる冬季の設備が出来てゐないからして、豫め相當の準備を必要とする。特に燃料は積雪期前之を用意して置かなければならない。〔山とスキー第一三號參照〕

十勝岳 富良野線上富良野より全一日で同山腹の中川温泉又は硫黄礦山事務所に達することが出来る。之を根據地として登山を試むることが出来る。麓より同事務所まではケーブルが通つてゐる。礦山は冬も作業を繼續してゐるし、温泉にも番人が居る筈である。北海道山岳會で此の頂上國境に小屋を新設することになつてゐる。〔山とスキー第三五號第三七號參照〕

其他、中央高地附近では尙登らるべき山岳は数多いが、その登路多くは未知である。此の外夕張岳、増毛山塊の群別岳、暑寒別岳、日高山脈及び阿寒岳、斜里岳、利尻岳等多數の山岳があるが、此等に關する記載は此處では省略する。

六、スキー競技會

次に毎年定期的に行はれるスキーの競技會をその成績に就て述べる。

北海道帝國大學スキー部では一九二〇年以來中等學校スキー競技會を行ふてゐる。此より以前に於て各スキー團體では團體内のスキー大會を開催してゐた様であるが、純粹の公開スキー競技會は此が最初であつて、爾來毎年一月最終日曜日に行ふてゐる。その競技内容は年によつて異なるが、第一回の小樽、札幌間約三〇キロメートルの驛傳競走の如きは非常な盛況であつて、その距離の如きは、驛傳ではあるが、今日迄日本に行はれたスキー競技の最大なるものである。その記録を示せば次の様である。

一九二〇年 小樽札幌間リレーレース、距離三〇、二キロメートル 走者各校七名。三時間四二分三七秒（聽立小樽商業學校）

一九二二年 小樽札幌間リレーレース 距離三〇、二キロメートル 走者各校七名 三時間三二分九秒（廳立小樽商業學校）

一九二二年 輕川大曲リレーレース 距離一〇キロメートル 高距差 約五〇〇メートル、出發、決勝、同一地點、走者各校四名 一時間一六秒（廳立小樽商業學校）

一九二三年 輕川大曲リレーレース 距離一〇キロメートル 高距差約 五〇〇メートル、出發、決勝、同一地點 走者各校四名 五四分一八秒（小樽中學校）

一九二四年 スキージャムビンダ 札幌、アルファシヤシツエ 競技者各校三名 最長不倒距離一二米八〇優勝校 小樽中學校

一九二三年より大日本体育協會にて全日本スキー選手権大會開催せらるゝに到り、之が北海道豫選會行はるゝこととなり、その第一回は小樽スキー俱樂部主催の下に小樽市緑ヶ丘に於て舉行せられた。その成績は次の通りである。

一キロメートル 六分三七秒 上野（樽中）

四キロメートル 二六分二五秒 島山（樽商）

一〇キロメートル 一時間一分四四秒 野中（樽商）

八キロメートルリレーレース 四九分四〇秒 小樽商業學校

ジャムブ 一五米 讚岐（小樽高商）

同年全日本選手権大會亦同地にて開かれ、左の如き結果に終れり。

一キロメートル 五分五九秒 上野（樽中）

四キロメートル 二七分四秒五分二 秋山（樺太）

一〇キロメートル 一時間三分四四秒 島本（樺太）

八キロメートルリレーレース 四九分五秒 小樽商業學校

ジャムブ 一六米一 讚岐（小樽高商）

全競技の成績により北海道スキー選手が朝香宮殿下のレブリカを得た。

一九二四年その第二回北海道豫選會は北海道山岳會の手により札幌市三角山附近に行はれた。その成績次の如し。

一キロメートル

三分五〇秒

兒島 (小樽商)

四キロメートル

二分五秒

大浦 (小樽中)

一〇キロメートル

一時間七分六秒

小川 (北大)

八キロメートル

五五分三八秒

小樽中學校

ジャムプ

一二米四〇

青山 (北大)

同年二月高田市に於て行はれた全日本スキー選手權大會に於て北海道スキー選手はクリスチアニアスラローム〔北大スキー部相川正義〕及びジャムプ〔北大スキー部緒方直光〕の日本選手權を得た。

小樽高等商業學校にては一九二二年以來實業團スキー驛傳競走を主催せり。コースは小樽緑ヶ丘より鹽谷方面を廻り歸着するものにして距離約八キロメートル。その成績は、

一九二二年

一時間一分四八秒

一九二三年

一時間一分五秒

一九二四年

一時間三分二五秒

美唄三菱

美唄B組

北海道帝國大學スキー部は一九二三年よりその部員大會に於てスキー競技を行ひ、いづれも札幌市三角山附近に在る同部所屬ジルバーシャイツエを中心として開催せり。

其他各地スキー團體に於ては一月末より二月中に於てその所在地附近にて大會を開催、団体内の競技を行ふてゐる。各中等學校は殆んど全てスキー部を有し、各熱心に之を行つてゐる。特に小樽市に在るものは、地形の關係上最も盛んで、従來競技會に於ては良好なる成績を擧げてゐる。

また各主要都市には夫々スキー俱樂部があるが、此はその他一般スキー家を網羅するものと、會社等の特別団体よりなるものと二種に別たれる。函館、小樽、網走等のスキー俱樂部は前者に屬し、美唄、夕張等に在るものは後者に屬する。旭川市に於ても旭川体育會にスキー部が設けられてゐる。

スキーに關する參考書

日本に於て發行せられたスキーに關する書物は今日迄大小とりまぜ十數冊を數ふることが出来る。以下年代順に擧げて見る。

一、スキー術研究報告及び意見 偕行社記事第四三六號

別冊附録 一九一二年

高田師團にて初めてスキーの研究が行はれたときの報告であつて、リリエンフェルド式に就て、軍事上の立場から説かれたるもの。恐らく日本に於ける最初のスキー書であると云ふ意味に於て、今日では唯歴史的價値を有するにすぎない。

二、スキー術 鶴見宜信著 四六半截九二頁 一九二二年 定價二五錢

當時陸軍スキーの研究委員であつた氏の袖珍本である。小學校の小供にも解る様に書いてある。

三、スキー滑走 金井勝三郎著 四六半截七一頁 一九一三年 定價一二錢

此も當時レルヒ氏の第一期講習生であつた氏の普及目的にかゝれた小冊子である。

四、スキー 稻田昌植著 四六判一九七頁 一九一六年

定價一〇〇錢

スキーの全般にわたつて稍詳しく書かれたのは此が初めてである。アルバイン式の基本動作を主として、ノルウェー式のスウイングを加へてあるが、未だスキーの發達が十分でなかつた時代の事として、今日から見れば足らぬ所が多い

五、スキー術 山口十八 金井勝三郎著 四六版三四四頁 一九一六年 定價六五錢

スキーの全般より登山旅行に到るまで詳細に説かれたもので、別に圖解がある。廣く洋書を涉獵して之に著者等の經驗を加へたもので、配列の適切と、譯文の正確なる今日に於ても邦書の中では信頼し得る書である。

六、最新スキー術 遠藤吉三郎 木原均兩博士著 三六二頁 定價八五錢

親しくノルウェーに遊んで同地スキー術を實際に於て、初めて本邦にもたらされた遠藤博士と、廣く諸書を参照せられた木原氏との共著で、ノルウェー式スキー術の解説に最も努められたものであるが、山地旅行の注意、雪崩等

に關する記載もある。

七、スキー家に 高橋翠郊著 三六版三九〇頁 一九一九年 定價一二〇錢

著者は越後のスキー家である。本書は全版スキーに就て解かれ、卷末に富士登山遭難記がある。

八、スキー術教程 福地義二郎 六鹿一彦共著 四六版

七一頁 コロタイプ寫眞版五一頁 一九二〇年 定價三八〇錢

北海道帝國大學スキー部員の練習基準たるスキー術教程に相當する各動作の著者等の寫眞を大成したものであつて文よりも寫眞によつて、獨習に便である。

九、スキー術楷梯 北海道帝國大學スキー部編纂 四六

版 一一〇頁 一九二二年 定價五〇錢

此は前記の教程を改訂したもので、更に詳細になつてゐるが圖版は全くない。コーチの參考書たるもので、スキーに關する技術及び知識の基準を示したものである。一九二四年第二版が出る。

一〇、スキーの要領 白鳥恒雄、讚岐梅二、高橋次郎

四六版九〇頁 一九二一年 定價五〇錢

多年小樽に於てスキーに没頭せられた三氏の極く簡明な記述である。

一一、スキー術早わかり 丸山晚霞著 三六版 一九二

二年 定價一八〇錢

早わかりと云ふよりも、むしろスキー家を混亂に陥れる不健全な書である。著者はツワイシムメンで少しばかりスキーを穿きかちつたゞけで、持ち歸つた洋書を拙譯してゐるのである。

一二、圖解最新スキー術 渡邊俊平、大内英三共著 一

九二三年 定價一二〇錢

一三、最近スキーの知識 高橋翠郊著 三六版一三三頁

一九二四年 定價一五〇錢

晩近の著しい發達に伴ふ著者の新しき見解である。

一四、趣味のスキー 東孝太郎著 四六版二四七頁 一

九二四年 定價一五〇錢

誤謬からず。

一五、スキージャムピング 廣田戸七郎著 四六版一七

五頁 一九二四年 定價一〇〇錢

行文生硬の域を脱せざるも、スキージャムプの全般にわたりて、本書の如く詳細なるは内外にその類尠し。スキージャムプを行ふ人の唯一信頼すべき指針なるべし。

一六、一日で出来るスキー 中山再二郎著 一九二四年

四六半截 定價一〇錢

一七、新しいスキーの練習 中山再二郎著 一九二四年

四六半截九六頁 定價五〇錢

共に關西スキー界の先覺者としての氏の講話体の書で、實地に於ける指導書として初心者に好い。

以上のうち一通りスキーに達し、更に深く研究せんと志す人には、五、六、七、八、九などがよく、ジャムプに就ては一五に越したものはない。

定期刊行物としては月刊の「山とスキー」を除いては、アサヒスポーツ、ツーリスト、「山岳」等にスキーの記事が載せられる。他の運動雑誌などに出るものは、殆んど信頼すべきものはない。慶應山岳部の年報「登高行」にはスキー登山に關する研究が發表せられてゐる。

以上の様に本邦に於けるスキーに關する著作はその數尠くないが、その多くがあまり完全でないので、より深く此を研究する人々にとつては自然、外國書に依ることとなるので、他の運動競技に比べてスキーの外國書は、我國でも相當多く讀まれてゐる。次にその主なるものをかゝけることにする。海外特にドイツ、イギリス及びノルウェーはスキーが盛んなだけに最も多くの刊行物がある。十七世紀以來の此種の出版物は枚擧げいとまがない。此處に上ぐるものゝ外、尙詳細を知らんとする方は、次の書によつて調べられるとよい。

1. Dr. A. Dreyer, — *Kleiner Ratgeber für die neuere alpine Literatur*. München 1923.
2. E. C. Richardson, — *The skimmer*. pp. 233—238.
3. Henry Hoek, — *Der Schi*. ss. 249—253.

4. Pege-Moissl, — *Jahrbuch des Wintersportes* 1924. ss. 405—428.

英國スキー界をリードしてゐるものは何と云つても

Arnold Lunn と Vivian Caulfield の二人であつて、前者は主として應用的スキー術に於て、後者はスキー技術に就て常に新しい科學的説明をなしてゐる。

5. Arnold Lunn, — *Cross-country skiing*. Pp. 118. Pl. 8. Methuen, London. 1920.
6. Arnold Lunn, — *Alpine skiing at all Heights and Seasons*. Pp. 114. Pl. 8. Methuen, London. 1921.
7. Arnold Lunn, — *Skating for Beginners*. Pp. 127. Pl. 8. Methuen, London. 1924.

以上は戦後に於ける氏の三部作とも云ふべきもので、甚だ簡明且つ遺漏なく記述されてゐる。同氏は戦前 *Skings*, (1913) を書いた。同じく Methuen より出版された *Mountain Craft* (edited by G. W. Young) の中にも氏は *Mountaineering on Ski* の一章を執筆してゐるが、その内容は *Alpine Sking* と大同小異である。

8. Vivian Caulfield, — *How to Ski and how not to*. Pp. 280. London, 1911.
9. Vivian Caulfield, — *Skating Turns*. Pp. 279. London. 1922.

前者は本邦にスキーが行はれ初めた頃から廣く讀まれてゐるものである。戦後新しい技術の説明など増補せられて

出版された。氏はまたスウィングを中心としての理論的説明と、豊富な挿畫を以て、新著を公にした。スキー技術の分解的研究をなす人には多大の参考となる。一概には云はれないがラン氏はどちらかと云へば山黨であつて、雪の研究などすぐれたものがあるに反し、カウルフィールド氏は畑黨と云ふべきである。尙イギリスでは此の外に

10. W. R. Rickmers,—Skiing for Beginners and Mountaineers.
 11. E. O. Richardson,—The Skirunner. Pp. 238. London, 1910.
 12. Richardson, Rickmers, Somerville,—Skirunning. London, 1904.
- などがある。リツクマーのは主として登山の方へ導かれてゐるに反してリツチャードソンのは特に英書のうちではジヤムピングに詳しい。且つ詳細なるスキー發達史があるノールウエーでは最も古くから發達しただけに歴史的に價値あるものが多い。
13. Fr. Huitfeldt,—Lærebog i Skifjøring. Christiania, 1896.
- の如きその一である。此は1907年 Berlin で “Das Skilaufen” として獨逸版が出た。
- 同年此に對してリリエンフェルド式スキー術の創始者マチアス、ズダルスキーがその教程本を出した。
14. M. Zdarsky,—Lilientfelder Skifahr Technik

Hamburg 1896.

此は1903年 “Alpine (Lilientfelder) Skilauf Technik” と題して第二版を重ねたが、その内容は簡單で、基本動作の要領を説述したものである。一時本邦のスキー界を風靡したアルバイン式の經典とも云ふべきものである。同氏は更に他の著作に於て、その技術の合理性と、山地に於ける應用とを説いてゐる。

15. M. Zdarsky,—Skisport. Wien 1902.
 16. M. Zdarsky,—Für Skifahrer. Ss. 211. Wien. 1916.
- 此等は氏の性格の一面をうかがふに足るものである。尙當時北歐對中歐スキー家の論争に關しては
17. Lilientfelder oder Norweger?
を讀むと兩者の關係を知ることが出来る。
中央ではビルゲリー、ヘーク、ルーテル等多くの著作を出してゐる。
 18. Henry Hoek,—Der Schi und seine sportliche Benutzung. Ss. 268. München. 1906.
- 此は日本でも可なり多く讀まれてゐる様である。翌年再版し一九二二年第七版が出た。一九〇八年フランス譯 *Le Ski* が出てゐる。多くの挿圖によつてスキーの全般を秩序的に説いてゐる良書と云ふべきである。氏はまた簡單な入門書として次の著がある。
19. Henry Hoek,—Wie lerne ich Schi-laufen. Ss. 59.

München. 1907.

序文にも書いてある通り、此は簡單を主としたもので、獨特の挿畫によつて説明されてゐる。一九二四年ルーテルの手によつてその第一版が出た。

20. Henry Hoek,—Merkbuch für Schiläufer in 500. Sätzen. SS. 46. München. 1921.

此は更に簡潔にしたもので、全般を分類して合計五百の要點を擧げてゐる。

21. Georg Bilgeri,—Der alpine Skilauf. SS. 67. München. 1911.

やはり第一歩から説いたものであるが、山地に於ける實際に及んでゐる。ヘーク氏と共に早くから日本に知られたスキー家である。一九二二年改訂第三版が出た。

22. Carl J. Luthner,—Der Skionurist. SS. 162. Bl. 16. München. 1913. 2. Auflage. 1921.

23. Carl J. Luthner,—Schule des Schneelaufs. SS. 67. Bl. 47. Stuttgart. 1913. Neue Aufl. 1923.

24. Carl J. Luthner,—Schnee lauf ausbildung. München. 1916. 4. Aufl. 1922.

25. Carl J. Luthner,—Ski und Skilauf. SS. 31. Ravensburg. 1912.

第一のものは、スキーの山地旅行をするものにとつては多大の参考となる。第二はスキーの全般の手引をなせる簡單なものである。第三のは獨逸スキー聯盟の教程である。

尙此の外氏には、ウインタースポーツに關する多くの著があるが此處には略する。

26. Anton Fendlich,—Der Skiläufer. SS. 96. Bl. 16. Stuttgart. 1908. 20. Aufl. neu bearbeitet von W. Flaig. 1923.

スキー全般にわたつて説かれてある。此の佛譯は一九一二年“Les sports de la neige”として出てゐる。氏には“Der Alpinist”といふ著がある。此の姉妹編である。

27. A. Zarn u P. Barphan,—Der Skiführer. Zürich. 1920. 2. Aufl. 1923.

戦後中歐スキー界の新著として第一に堆すべきものの、その練習法の如きは大いに参考に資すべきものがある。

28. Zsigmondy-Paulke,—Die Gefahren der Alpen. SS. 387. München 1911. 7. Auflage. 1922.

此のうちにはスキーのみならず、雪其他山地に於ける危険に就て詳細なる研究がある。Wilhelm Paulke 氏は 1898 年 Der Skilauf, seine Erlernung und Verwendung usw. の著も、此は 1905 年“Mannell de Ski”として佛譯された。また 1901 年“Der Skilauf in den Alpen”を書いた。

29. G. Dyrhén,—Skidåpnings almänna grunder. Stockholm. 1919.

30. G. Dyrhén,—Skidåpnings. SS. 64. Bl. 5. Stockholm. 1919.

31. Vilh Amundsen, — Skiløping. Kristiania, 1923.

右は北歐に於て近刊せられた三著である。参考までに上
けたにすぎない。アムンドゼン氏は國際スキー聯盟の主事
である。

32. Internationale Wetlaufbestimmungen. Ski.

(Reglement internationale des Concours de Ski)
Internationale Skikommission. SS. 10.
Kristiania, 1923.

此は國際スキー聯盟のスキー競技規定である。ノルウェ
ースキー協會の競技規定は英文のものが出てゐる。極めて
詳細である。

33. Norges Skiforbund, — Rules for Skiing Competitions
etc. Kristiania, 1923.

イギリス及び大陸にて出版せらるるスキーに關する定期
刊行物の主なるものを擧ぐれば

1. The British Ski Year Book.

Federal Council of British Ski Club. London.

此は一九一四年成立したイギリススキー聯盟より毎年秋
發行する年報であつて、Arnold Lunn, Capt. H. Martlet
氏が編輯してゐる。同國スキー界の情況は之に總括せられ多
くの新しい意見、考案等が載せられてゐる。

2. Ski, Jahrbuch des Schweizer Skiverbandes. Bern.

一九一四年その第一九年を發行した。編輯者は Othmar

Gartner 氏である。

3. Pa Skidor, Föreningen för Skidloppningens främjande i
Sverige. Stockholm.

スウェーデンスキー協會の年報。菊判。

4. Aorbog, Föreningen til Skidrettenns fremme. Kristiania.

ノルウェースキー協會の年報。毎號菊版數百頁のもので
ホルメンコーレン 競技會の狀況等を知ることが出来る。競
技的スキーの研究には多大の參考となるものである。

5. Pege-Moissi, — Jahrbuch des Wintersportes 1924.
SS. 523. Wien, 1924.

世界のスキー界の情況を詳細に載せてゐる。競技の結果
スキー団体等全般にわたり、スキー年鑑として優良なもの
である。

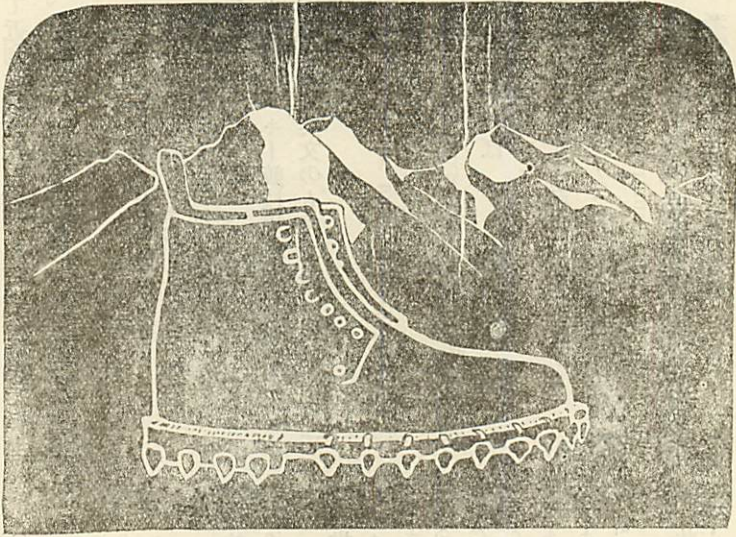
6. Der Winter. München.

O. J. Luther 氏の編輯でシーズン中不定期に十數號發行
せらるゝ雜誌である。今、第十七卷が出てゐる。大部分は
スキーの爲に費されてゐるが、その他の記事もある。中歐
スキー界の情況は之によつて察知し得られる。

7. Ski, Korrespondenzblatt d. Schweizer Skiverbandes.
Bern.

此もシーズン中不定期に毎年十數號發行せらるゝスウイ
ス、スキー協會の機關雜誌である。

其他 Deutsche Alpenzeitung, Alpine Journal 等には毎號
スキーの記事が出てゐる。



靴一キスと靴山登

.....

角目丁四區郷本市京東

店靴屋田太

番二一七四小石川電話

番七二一六京東替振

◆山とスキーの會は北海道帝國大學スキー部の有志が、此の雜誌を發行する爲に作つてゐる會です。

◆スキーを研究せられる人、登山に興味を持たるる方が一人でも多くお読み下さることをお願いいたします。

◆山岳及びスキーに關して何なりとも御寄稿下されんことをお願いします又印畫の御惠送を切望致します。原稿紙は御申越次第お送り致します。

◆原稿は、〃〃を一字とし、行を更めるときは一字下けること。

◆記事中の數量は全て、C. G. S. 係によられん事を望みます。

◆雜誌代金に就て一應下記の諸項を御承知下さい。

定 價 金參拾錢

*前金御申込か、現金でなければお渡しいたしません。

*御送金はなるべく振替にてお願い致します。

*六冊分前金拂込の方には送料を頂きません

*前金の切れた時には最後の分の包装にその旨記します。次の御送金あるまで配本を見合せます。

*本誌は營利的の刊行物ではありません。紹介、縁故の有無にかゝらず雜誌の代價は頂きます。

大正十三年十一月三十日印刷

大正十三年十二月一日發行

(毎月一回一日發行)

編輯兼印刷者 佐々木 政 吉

札幌市北一條西二丁目

印刷所 札幌印刷株式會社

札幌市北六條西六丁目

發行所 山とスキーの會

振替口座水樽八四九五番

山 岳 雜 誌



◆北海道山岳の雄姿を見よ◆
◆眞に山岳寫眞雜誌の權威◆

北海道山岳寫眞號

實費 八拾錢 郵稅四錢

札幌市北海道廳内

發行所 北海道山岳會

La Gazeto
de la
Monta kaj Skia Klubo
No. 44. Desembro. 1924. Sapporo. Japanujo.

美滿津ノ
ウインター・スポーツ
各種用具



合 名 會 社

美滿津商店

東京・本郷・赤門前

大正十三年七月二十七日第三種郵便物認可
大正十三年十一月三十日印刷
大正十三年十二月一日發行
納本

山とスキー

第四十四號

定價金參拾錢